

ベビーリーフでも殺虫剤アセタミプリド水溶剤の残留濃度は基準値以内である

コマツナ等のベビーリーフと通常の収穫物において、アセタミプリド水溶剤を時期をかえて散布処理し、残留濃度を比較した。その結果、収穫7日前までの散布では、ベビーリーフの残留濃度は通常の収穫物より低くなる傾向であった。これは、散布後の生育量の差が主要因と考えられた。

内容

葉物野菜は通常草丈20cm以上で収穫するが、近年、ベビーリーフと呼ばれる10~15cm程度で収穫するものが増加し、サラダ等へ利用されている。ベビーリーフは小さく軽いため、生産者や消費者は農薬が残留しやすいというイメージを持ちやすい。そこで、ベビーリーフと通常収穫の残留濃度を比較検討した。

試験は、コマツナ「ピノグリーン」、ミズナ「早生ミズナ」を用いて、ビニルハウスにて実施した。2010年11月28日に播種後、ベビーリーフは12月13日に、通常収穫は2011年1月6日に収穫した。収穫の7、14日前に、ベビーリーフで用いられることの多いアセタミプリド水溶剤（有効成分20%）の4,000倍希釈液を散布し、収穫時の残留濃度を調べた。

その結果、農薬ラベルに記された適正な使用時期である収穫7日前の散布では、ベビーリーフの残留濃度は0.65ppmで通常収穫の62%となった（図

1）。収穫14日前の散布ではベビーリーフが通常収穫よりさらに減少した。同様に、ミズナでもベビーリーフは通常収穫より農薬残留が低下した。

次に、農薬散布日と収穫日における作物体の生体重を測定したところ、ベビーリーフの方が通常収穫より散布日から収穫までの重量増加が3.4倍と大きかった（図2）。散布後の生育量の差がベビーリーフの残留濃度がより低下する主要因と考えられた。

普及上の注意事項

農薬ラベルに記された使用方法は、通常の収穫を想定して決めており、ダイコン以外の野菜では間引き菜等の若い葉葉を想定していない。今回の結果は限定された作物と農薬の組み合わせであり、現地においては、あらかじめベビーリーフの農薬残留量を調査し、残留基準値超過の恐れがないことを確認してから使用する必要がある。

望月 証（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2416）

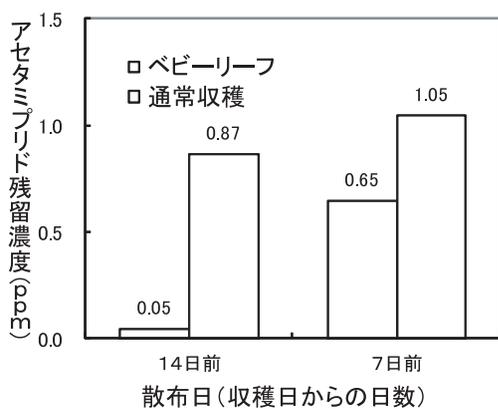


図1 コマツナにおけるアセタミプリド水溶剤の散布日と残留農薬(残留基準値は5ppm)

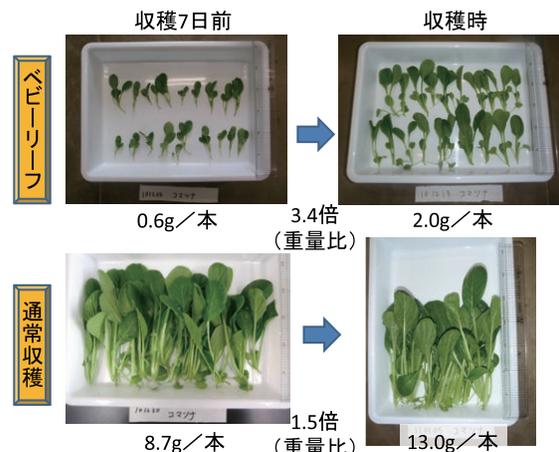


図2 農薬散布(収穫7日前)から収穫までのコマツナの重量変化